

## 田山花袋について

正宗 白鳥

帰朝後、一度訪問しようと思いつきながら、近年用事以外に、誰れの家へも行ったことのない私は、田山氏の家へも行きそびれた。去十三日、新聞で、氏の病氣危篤の記事を読んで、驚いて駆けつけた時には、最早面会謝絶で、私は、ガラス越しに、氏の寝姿を一瞥して永遠の別れを告げただけであった。古風な迷信で情趣を添えるつもりなら「虫が知らせた」といつてもよからう。私は、先月ふと、改造社発行の円本の「花袋集」を読んで、多少の感慨を催したので、その感想の一端を中央公論の時評のうちに洩らすとともに、花袋氏へ宛てて、親しみを込めた私信を書いた。パリの古寺院の「サン・ソベラ」寺の絵葉書を用いたが、それは、氏の感想文の中に「中世紀のミスチシズムの匂いの嗅がれる」この寺院のことが懐かしみを持って書かれていたためであった。しかし、知人に対しても自分の衷情を訴えるような手紙を贈ることの嫌いな私は田山氏への葉書をも、書いたあとで、自分の多少の感傷的気持ちが悪くなったので、机の上に置いたままになった。そして、氏の逝去した今日では、その絵葉書を出さなかったことを後悔している。氏はそれを見たら屹度喜ばれたに違いない。私の西洋見聞談を、喜んで耳を傾けて聞いてくれる人は、誰よりも田山氏であろうとは、私はかねて思っていた。

花袋氏には、私は、もう何年会わなかったであろうか。四、五年前の岩野泡鳴の追悼会に会ったのが最後であったと思われる。その前には、大地震前だと記憶しているが、田山の自笑軒で、氏の「源義朝」出版記念会のあった時に会ったので、その時、氏が「僕がいけなくなつたから、皆がこんな会をしてくれる」と、感傷的にいったのが、私の耳に残っている。「いけなくなつた」というのは、「世間的人気のなくなつた」という意味であった。

そのほか、「新潮」の合評会で会つたくらいで、近年氏の風貌に接したことは極めて稀であったが、昔は、たびたび氏の宅を訪問した。私が文壇に出掛つたところから、最も力強く私を引立ててくれた先輩は、田山花袋氏であった。私も、氏の作品や評論から、少なからぬ感化を受けた。感化は受けたというよりも受けたつもりであった。私と氏とは、生まれつきがそう似ていないらしいから、氏からの刺激が私の作風や対人生の態度を変化させてはいないだろう。田山氏が仏露の近代文学から受けた感化も、受けたつもりではないかと思われる。私は、今度「花袋集」を読んで、感想を新たにしたい。兎に角、氏の作品は、一時の流行的作品ではなくって、年月を経て読んでも、新しい興味を呼び起こせるに足るものなのだ。

氏の自然主義作家としての最初の長編小説、「生」は、当時私が奉職していた読売新聞に掲げられたもので、読者受けは、その前の「魔風恋風」や「コブシ」など小杉天外氏

の小説に及ばなかったらしいが、文壇的には、自然主義小説の作風の標本を示したものであるとして注意された。完結後日曜附録欄で合評をしたがその評のうちで、岩野泡鳴が「主人公がセンチメンタルだ」といって非難した。それについて、花袋氏は、センチメンタルな人間を書いたのだから仕方がない。作者の態度はセンチメンタルではないといっている。当時は前代文学に反抗する意味もあって「センチメンタル」ということを文学上の最大罪悪のように思っていたのだ。

私は、今度「蒲団」や「生」を読み直して、日本の自然主義初期の標本的作物に、日本の文学史上にかく画時代的の価値のあるのを認めるとともに、フローベル、ゴンクールなど、花袋氏の傾倒していたフランスの自然主義作家の小説との相違を思い出した。それから「蒲団」や「生」などが、日本の青年作家に、新しい人生鑑賞の態度を教えるとともに、小説の書き易さをも暗示した。「こういう調子でいいのなら、小説は造作なく書けるものだ」と思わせた。

始祖は苦しんだ。しかし、追隨者は気楽だ。田村松魚氏が昔、「アメリカにいた時、同居していた日本人が、笑いこぼして二階から下りて来て、田山花袋がこんなことを書いたといつて『蒲団』の出ている『新小説』を突きつけた」といって、そのときの嘲笑的気分を話したことがあった。日本ででも、多数の人には冷笑をもって迎えられたので、ああいうものを発表するには、作者も余程の勇気を奮ったにちがいない。無論、時世が、硯友社風の形式文学に飽き足らなくなっていたので、「蒲団」などに共鳴するようになったのだが、田山氏のような勇敢なる始祖がなかったら、日本の近代文学も余程違っていたであろうと思われる。時世と英雄との関係は、ここでも考えられる。夏目漱石氏の小説には模倣者がなかった。「猫」や「坊っちゃん」などは、漱石氏でなければ書けない。しかし、「蒲団」などの真似は出来やすい。いろんな作者のそれぞれの「蒲団」が連綿として、日本近代文学にあらわれた。

努力の人花袋氏は、倦まずして多量の作品を出すとともに、よく闘った。一念思い詰めていた氏は、時世に動かされておざなりをいう人ではなかった。しかし、移り気な現代日本では、一時容易く氏に雷同した如く、次第に氏の苦言にも耳を傾けなくなった。

今年のはじめに「中央公論」に出た、氏の感想文は、世間に発表された氏の最後の文章であるが、現代文壇の悪風潮を非難して意気盛んであった。森鷗外氏は、折衷主義をきらい通俗をも全てきらっていて、氏自身の作品にも、通俗臭はなかった。花袋氏も、その作中に自ら通俗味を持ってはいたが、通俗を非常にきらっていた。

「当て気味の作がこのごろは非常に多くなってきている。つまり社会とか読者とか流行とかいうものに、作者が捉えられて行っているのである。「どうかしてうまいものを書きたい」これでさえいけないのに、今では「どうかして当るものを書きたい」という風になって行っている。イヤな傾向だ」

以前から、田山氏はしばしばこういうことをいっている。しかし、田山氏のいわゆる、

「イヤな傾向」は、年々深く行って行くばかりである。笛吹けども踊らず。文壇は氏の言説に対して、風馬牛相関せずである。この後、氏が健在で、所信を強調したにしても、昔の氏の勃興時代のような共鳴追隨者は得られないかもしれない「孤独―そこからのみ芸術のまことの清い泉は湧いてくる」と、氏のいつている如く、氏自身で、誇るべき孤独の境に住んでいなければならぬかも知れない。「ある僧の奇蹟」にあるような心境が、あんなに世を動かせるだろうか。

しかし、どちらにしても、明治文学史上に残した田山花袋氏の跡は大きい。氏は書きたいことを思う存分に書いたのだから、文学者として、遺憾なしとっていい。

私は、詩人歌人の短冊は五六枚しか持っていないが、今出して見ると、そのうちでは、田山氏の字が一番すぐれている。気取りがなく俗気がなく、見ていていい気持ちとする。氏はよく「何を描いても、作者はその心境を磨かなければならない。かくそうとしても隔すことの出来ないのは、その作者の心境である」といつているが、田山氏自身が、多年その心境を磨いて来たことは、小説よりもその筆跡において一層明らかに感じられるぐらいである。

昔、岩野泡鳴がある会で、田山氏に向かって「君が一番長生をして、我々の後片付けをしてくれるだろう」といつて笑ったことがあったが、その頑健な田山氏も、羸弱な我々に先立って逝いた。体験を重んじていた氏は、死に直面して、どういう体験を得ていたか。

※本文の表記は、新漢字・新かな遣いに改めた。

※出典「週刊朝日」17巻23号(花袋追悼号)昭和5年5月25日